

# 徳法寺

## 親しみやすい仏教

### 念珠編

杉谷 伊吹

こんにちは、今回からたまに「親しみやすい仏教」をテーマに文章を書いてみようと思います。具体的には、日常的な仏具や身近な仏教施設などについて、簡単に解説してみようという試みです。あまり細かいところまで掘り下げずに、分かりやすい形を目指してみます。

初回は「念珠（ねんじゆ）」についてです。念珠は、仏を念ずる時に用いる珠（たま）という意味で、数珠（じゆず）とも呼ばれます。礼拝する際には手にかけて用います。

念珠には様々な種類があるので、大きく分けると「本式連念珠」と「略式念珠」（片手



五条袈裟用本式連念珠

念珠）になります。本式連念珠とは、法要の際に用いる正式な念珠で、珠の数が煩惱と同じ百八個あります。長いので二重にして用います。略式念珠は、日常使いの念珠で、珠の数は百人の半数の五十四個、三分一の三十六個、四分の一の二十七个、六分の一の十八個など約数になっているものもあれば、全く関係のない二十二個や二十五個のものもあります。特に、浄土真宗では略式念珠の珠の数にこだわりがないので、様々なものがあります。真宗大谷派で、男性門徒用の本式連念珠を見る事はほとんどありません。代わりに略式念珠に本式連念珠の房を付けて、法要と日常の兼用として用いることが多いようです。僧侶は、日常の参りには略式念珠を用い、本式連念珠は法要に合わせて四種類を使い分けています。念珠の形や房の形は宗派ごとにそれぞれです。同じ浄土真宗の中でも、大谷派と本願寺派では房の形が違います。葬儀や通夜の際に他の人の念珠を見てみると、様々なタイプがあることに気付くと思います。次に、念珠の使い方について書かせて頂きます。

念仏や真言を唱えるのに合わせて、念珠の珠を指で爪繰（つまぐ）っている人や、摺（すり）り鳴らしている人を見ることがありませんか。これ



略式念珠

は念珠を唱えた念仏や真言の数を数えるための道具として使っているからです。そのような宗派では、念珠の珠数が重要な意味を持っている訳です。では浄土真宗は念仏を数えないのかと問われると、答えは「はい」です。師である法然聖人とは違い、親鸞聖人は念仏の回数にこだわらなかったので、浄土真宗では回数不問なのです。ですから、浄土真宗では手にかけて合掌し静かに念仏を称えます。浄土真宗でも、僧侶用や女性門徒用の念珠の一部が、珠の数が百人の本式連念珠を用いているのは、伝統仏教宗派の慣例にならっているからです。例外的な念珠の用途としては、仏前結婚式の際、指輪交換の代わりに念珠を交換するということがあります。私も仏前結婚式をした身なので一つ持っています。ちょっと高価なものを選んだので日常使いはしていません。普段は別の念珠を持ち歩いています。

ここまで「親しみやすい仏教」ということで書かせていただきましたが、いかがでしたか。身近な道具である念珠への理解や関心が、少しでも高まったなら幸いです。



本式連念珠の房付略式念珠

# 日本の神々と仏 3

杉谷 淨

今回は「日本の神々と仏教」の三回目です。

平安時代になると、日本の神々は、仏教の仏・菩薩が日本の地に仮の姿で現れたもの（化身・権現）であるとする本地垂迹（ほんじすいじやく）といわれる考え方が広まります。

「垂迹」とは中国の僧肇（じょう、三八四？-四一四）の言葉で、目に見えるものにはすべて本質的なものが隠されており、形を持たない本質的なものは目に見えないものを通さなければ存在しないのと同じであるという意味です。これは、言葉に表すことができない「真理」と、そこに至るまでの方法である「方便」という仏教の教えを理解するうえで、日本の僧の間で広く用いられていた言葉でした。これが、永遠の仏が釈迦仏としてこの世に現れた、中国の僧が聖徳太子として生まれ変わった、とされるとその説明に使われるようになり、さらに神々は仏・菩薩が我々を救うために日本に現れた化身であるとされるようになったのです。

この考え方が一般に広まるきっかけとなった一つに祇園祭があります。この祭りは、都を奈良から京都に移した桓武天皇の子で、皇太子の時に暗殺された早良親王（さわらしんのう、崇道天皇。七五〇？-七八五）の祟りを鎮めるために、当時の日本全国の州の数であった六十六本の鉾（ほこ）を掲げ、釈

迦入滅の地である祇園精舎の守護神とされる牛頭（ごず）天王の神輿を担いだことに始まります。牛頭天王がインドの破壊神シヴァ神の変化（へんげ、アバター）とされることから、凶暴な神とされる須佐之男命（すさのおのみこと）と同一視され、さらに須佐之男命が薬師如来の化身であるとされたことで、祇園社（八坂神社）に薬師如来が祀られるようになりました。

ただし、この考え方は何の根拠も法則性も無いまま広まっていったために、神と仏・菩薩が一対一に対応していないことも珍しくありません。例えば、天照大神は大日如来の化身として語られることもあれば十一面観音菩薩の化身とされることもありま

す。逆に、薬師如来は祇園社の須佐之男命だけではなく、松尾神社の神や古事記で最初の神とされている国之常立神（くにのとこたちのかみ）などもその化身とされています。阿弥陀如来の化身とされる神々も、八幡神や熊野権現など数多くいます。ただし、仏・菩薩の生まれ変わりとされた神（権化神、権社神）は、ごく一部のよく知られた神々だけで、多くの氏神などの地域神は、仏に救いを求めるもの（実類神、実社神）という立場のままでした。

鎌倉時代になると、本地垂迹は、真言系の両部神道と天台系の山王神道に整理されるようになります。神道という言葉は仏教から生まれたのです。

両部には、真言の世界観である金剛界・胎藏界の二つによって神道を説明するという意味と、仏教と神祇の二つが習合したという意味があります。代表的なものに、大和三輪明神に結びつけられた三輪神

道（三輪流）と、仁和寺門跡に伝えられた御流神道（仁和寺流）があります。三輪神道は、大日如来が天照大神と三輪大明神と伊勢神宮に化身したというもので三輪山こそが神祇発祥の地であるとしています。御流神道は嵯峨天皇が空海から神道の灌頂（かんちよう、奥義を伝授されること）をうけたという伝承により仁和寺が相伝しているものです。

一方の山王神道は、延暦寺の鎮守である日吉社（日枝神社）の祭神である山王神を、仏教真理をあらわす山王権現とするものです。

この様に仏教僧によって日本の神々が神道として整理されていきました。すると、今度は神職からも神道が提唱されるようになります。今回はそのお話



祇園祭の鉾



# メルボルンで珈琲を

杉谷 紬

六月の初め、友人と一週間ほどオーストラリアを旅行しました。オーストラリアは以前大学院の授業の一環で訪れたことがあり、是非また訪問したいと思っていました。前回の訪問記は二〇二〇年五月発行の寺報に載せてあります。英語圏の国ということもあり、飛行機や宿など諸々の手配はすべて自分たちで行いました。

今回はシドニー、エアーズロック、メルボルンの三か所を回りました。旅行中特に新鮮に思われたのは、私たちが全く「外国人扱い」されないことです。「言葉が通じないかもしれない」とさえ思われていないふしがあり、気軽にトイレの場所など尋ねられます。向こうの都市部ではアジア系住民も珍しくないためでしょうか。外国人旅行者への特別な親切さや配慮もない代わりに、よそ者としての滞在のストレスもありません。まるでこの国の住民になったかのような気分で歩いたり、買い物をしたりしていました。

南半球にあるオーストラリアの六月は秋から冬に向かう季節です。シドニーに行った時は、ちょうど冬季恒例の「ビビッドシドニー」というライトアップのイベントが行われていました。今年のテーマは「Vivid Sydney, Humanity」。公式HPでは、人類が想像力と創造力により様々な他者と協力してよりよい未来を築くことだと説明されています。この

国がかつてイギリスによる植民地支配を受け、今は様々な民族が混ざりあつて暮らす国であることも意識されているかもしれません。有名なオペラハウスでのプロジェクションマッピングなどとても華やかで、会場は光の装飾を身につけ、屋台やライトアップを楽しむ人で溢れかえっていました。しかし、同時に道端でうずくまるホームレスの人達も目について複雑な気持ちになりました。

エアーズロックは、今は先住民族の言葉に基づいてウルルと呼ばれることが多いのですが、この巨大な岩を一周するおよそ十キロメートルの歩道があります。私は友人とともに、一日かけて一周しながら先住民の残した壁画や、使用していた水場、滞在拠点の跡などを見て回りました。また、夜は星空観察の現地ツアーに参加し、周りに本当に光源がない状況だからこそ、地平線まで限なくくつきりと星が見える様に見ほれながら、南半球のこの時期ならではの星の配置や星座の話を楽しみました。



ウルル (エアーズロック)

そのツアーの際、偶然近くにいたコリア系の女性と言葉を交わしていると、彼女が現在ワーキングホリデーでメルボルンのカフェで働いていることが分かりました。ちょうど次の滞在地がメルボルンだったこと、そしてメルボルン



ウルルで乗ったラクダの「ドクター」

の名物コーヒー「マジック」にも惹かれ、彼女の職場を訪れることを約束しました。彼女とはメルボルンまでの飛行機も同じで、道中もとても親切に案内してくれました。彼女の働いているカフェで再会した時はとても喜んでくれ、店長さんの計らいでコーヒーをサー

ビスしていただきました。そのカフェには日本からワーキングホリデーで来ている女性もいました。その女性に、今回私たちが受けた手厚い親切について、どのように報いたらよいかこっそり相談してみたのですが、その返答は「お礼はいらない。ただ受け取ればいい。」というものでした。

昨今とてもよく聞く言葉「多様性の尊重」、それがどういったものなのか、この滞在では折に触れて考えさせられたように思います。他者について、頭の中で勝手に像を作り上げることなく、当たり前のようにぶつかり合いながら形を探っていく。綺麗づくめ・いいことづくめでいくのは無理でしょうが、そんな粘りのあるスタンスを続けていく強さ。その強さが私にあるかは分かりません。しかし、きっとその過程には、一生大事にしたいと思えるようなきらめく瞬間も潜んでいることでしょう。

# 徳法寺からのご案内

## 心の相談室

毎月第四土曜日の午後三時から午後五時まで

横安江町商店街にある「いちよう館」二階にて真宗大谷派の僧侶による「心の相談室」を開いております。個室で相談をお受けします。仏事はもちろん、家庭や職場、学校など、どのようなお話もお聞きします。相談は無料です。予約も必要ありません。相談内容は一切外に漏れることはありませんので、お気軽にお訪ねください。

## サンガ茶話会

毎月第一木曜日の午後三時から午後五時まで

横安江町にある東別院敷地内「真宗会館」一階囲炉裏の間にて「心の相談室」スタッフによる「サンガ茶話会」を開いております。座談形式となっております。僧侶やその場に集まった方々とお話しませんか。いろいろな方に聞いてほしい話、聞いてみたい話がある方はお気軽に参加してください。他の参加者の話を聞いていただけでも構いません。参加は無料です。予約も必要ありません。出入りも自由ですので、途中参加、途中退室でも大丈夫です。お茶とお菓子をを用意してお待ちしておりますので、お気軽にご参加ください。

## 徳法寺 仏教入門講座

毎月二十一日午後七時半より

講師 徳法寺住職 杉谷淨

- 八月 足利仏教 四 応仁の乱2
- 九月 足利仏教 五 戦国時代1
- 十月 足利仏教 六 戦国時代2

しばらく足利時代の話です。この時代は、南北朝から応仁の乱、さらには戦国時代と、次から次へと戦が続きます。南北朝とはいっても二つの朝廷が戦っていたわけではなく、全国の勢力が敵味方の立場を変えながら戦っていました。応仁の乱も同様で、二つの勢力に別れながら戦ってはいましたが、集合離反を繰り返していたため、源平合戦のように決まった勢力同士の戦いではありませんでした。

この流れが戦国時代へと繋がっていきます。この時代に起こる一向一揆や法華一揆も、このような勢力争いの中で起こったもので、最近あったイスラム国のような宗教的色合いが強いものではありません。立て続けに起こった戦は、従来の身分社会を崩壊させていきます。経済的にも意識的にも自立し始めた民衆は、大衆文化を享受するようになります。価値観が大きく変化していく中で、仏教もそれに寄り添う形で、変化していくこととなります。

参加費はお賽銭のみです。どなたでもお気軽にご参加ください。

## 徳法寺秋彼岸展

### 山口てつじ絵本原画展

九月十四日(土)から二十九日(日)まで

徳法寺では三回目となる山口てつじ氏のイラスト展を行います。今回は福音館書店の「ちいさなかぐのとも」シリーズで発刊した絵本三冊の原画展になります。布に描かれた原画の風合いをお楽しみ下さい。

### 秋彼岸法要及び永代経法要

九月二十二日(日・祝)午後二時から午後四時まで  
読経の後、当寺住職の法話となります。



表題揮毫 中田 八千代

徳法寺 石川県金沢市野町二丁目三二番四号

TEL 076(241)5219

ホームページ <http://tokuhou-ji.com>